

林政ジャーナル

No. 3

1990年3月20日

発行所

日本林政ジャーナリストの会
〒100 東京都千代田区永田町2-4-3
電話 03-587-1210

第12回定期総会を開く 予算、活動計画など決まる

第12回定期総会は、2月19日17時30分から、東京・内幸町のプレスセンターで開き、1989年度活動報告、同決算報告を承認するとともに1990年度の活動計画及び予算を決定した。また、幹事を補充することになり、畦倉実(朝日)、上松寛茂(共同)、小野 寺紀彦(共同)、大塚恵一(朝日)の四氏をお願いすることになった。

また、特別講演は御茶ノ水女子大の内嶋善兵衛教授から「地球環境の変化と森林」と題してお願いした。

総会終了後、懇親会を開き、田中農林水産事務次官、齋林野庁長官、角道農林漁業信用基金理事長ら多数の来賓も出席してなごやかに懇談した。

1990年度は、160万円余の予算により、次のような活動を行う。

1. 研究会

「地球環境と森林」を年間テーマとして、内外の森林・林業問題に取り組む。

2. 3木会

できるだけ多く開催する。(すでに3月19日にウッディランド東京、15号埠頭、東京営林局木のアトリウムを視察、東京営林局幹部と懇談会を開催した)

3. 共同取材

長野県鬼無里村にて、体験林業及び地元林業関係者との懇談会を予定。(日時は追って連絡するが、新緑のころを考えている)

4. 会報の発行

5. 幹事会

6. 山村との交流

7. 組織の拡充強化

地球環境の変化と森林

(内嶋教授の講演要旨)

<気候変動と砂漠化>

現在、世界各地で年間600万ヘクタールもの砂漠化が進行している。それは、自然的要因を過剰耕作、過放牧、不適切な灌漑等の人為的な要因が加速する形で引き起こされていると考えられる。

大気の温室効果の増大は、地球上における大規模な大気の流れを変化させ、砂漠化の進行に影響を及ぼす危険がある。一方、砂漠化は地表面の熱収支に変化をもたらす、降水量の減少など、地域的な気候の変化や長期的な気候変化にも影響を及ぼすものと見られる。

今後、砂漠化のメカニズムの解明やモニタリング、砂漠化防止や乾地農業生産の安定化等の技術協力が必要であろう。

<気候変動と森林・林業>

気候変動が日本の森林植生に及ぼす影響

気温については、各種の樹木は、それぞれ適応域をもっており、地球温暖化の下では、植生分布の移動が問題となる可能性がある。また、降雨等他の気象要因、土壌要因、生物要因等多くの要因も変化すると考えられ、それに伴う総合的な影響評価が今後の課題となろう。

過去の温暖期である縄文時代前期（現代よりも2度C程度温暖）の植生花粉分析等による復元図と、現在の植生との比較では、かなりの違いが認められている。

しかし、森林植生の移動には何百年という長期間を要し、予想される温暖化のスピードには追従できず、環境ストレスが森林に強く作用することが懸念される。（①短期的には、植物の季節的な生活様式、成育期間、成長量の変化が起こり②次いで中期的には森林構成種の移動が始まり③長期的には森林帯や群落の移動をもたらすものと予測される。このような植生の移動は、北限では温度の上昇に伴って分布を拡大し、南限ではより南に分布する生態的地位の類似した植物の分布拡大によって消滅することが予測される。）

樹木は、環境が悪化した場合でも、徐々に成育悪化しながらも、残存植生としてかなりの期間生存する。一般に、繁殖までの期間の短い種では移動は容易と考えられるが、成育範囲の狭い種や繁殖力の弱い種では、絶滅の懸念が大きい。この場合、生態系の孤立等はこれを加速するものと考えられる。

気候変動と森林の一次生産

植物の光合成量（一次生産力）が年間1ヘクタール当たり10トン以上という生産力の高い地域は多湿な温帯・熱帯域に多く分布しており、高緯度では太陽エネルギーの不足により、一方、亜熱帯高気圧帯は高温・乾燥により、その値は小さい。

二酸化炭素濃度上昇の直接的影響は、農作物と同様、樹木でも光合成や生長の促進、葉数の増加

等に有利に働くものとみられる。

生産力は、光合成促進等の増加要因と呼吸の増加とのバランスにより決定されるが、条件の変化に対応して植生が変化するまでには長期間を要するため、気温上昇により、生産力はそれほど増加しない懸念がある。一般的には、分布限界地付近の森林への影響が大きいとみられ、温暖化により、温暖地域や分布の南端では、現存樹種の不適応が懸念される。この場合、病虫害の多発にも注意が必要となろう。

森林が気候変動に及ぼす影響

森林は、二酸化炭素の吸収、固定という機能を発揮しているとともに熱収支、水収支の作用等を通じて、気候変動を緩和する作用をもっている。

熱帯地域では、森林の減少により二酸化炭素の吸収・固定能力が低下していると推定されているが、日本、ヨーロッパでは、森林は二酸化炭素の純吸収源となっているとみられている。

国際農政ジャーナリスト・フォーラム

6月24～30日大阪で開かれる

農政ジャーナリストの会主催の「国際農政ジャーナリスト・フォーラム」が下記により開かれます。日本林政ジャーナリストの会会員も、会員扱いとなります。

記

- テーマ 「21世紀の地球は？ 食料は？」
- 期間 1990年6月24日～30日
- 開催場所 大阪商工会議所・国際会議場、大阪コクサイホテルほか
- 主要日程
- 24日(日) 登録
- 25日(月) オリエンテーション「いま日本農業と食料は？」
記念講演 EC農業担当委員 マクシャリー 東大名誉教授宇沢弘文
全体フォーラム
- 26日(火) 全体フォーラム 分科会①食料生産と社会体制②地球環境と農業
- 27日(水) 見学旅行(大阪市内のスーパー、花の万博など)
- 28日(木) 見学旅行(卸売市場、大阪府農林技術センターなど)
- 29日(金) 見学旅行(京都)
- 30日(土) 東京での会議(詳細は未定)
- 参加費 会員 10,000円(日本林政ジャーナリストの会会員は、会員扱い)
非会員 20,000円(交通費、宿泊費、見学旅行の費用は含まない)

詳細は農政ジャーナリストの会(東京都千代田区大手町1-8-3 農協ビル 電話 03-245-7636)まで。

木と語る

共同通信の仲間がまとめた本だ。東京にいる私には気づかなかったが、共同通信が昭和63年の通年企画「日本再考 木と語る」として毎週一回配信し、地方新聞35紙に掲載されたものである。

昨今の地球環境問題の高まりは、それはそれとして大変良いことなのだが、議論を聞いていると、木を伐る林業を否定するような短絡論も聞かれる。こういう社会的風潮の中で、この特集は、森林を守ることの必要を主張するとともに、「木の復権」つまり木を利用することの効能を説いている。

しかも難しく論じるのではなく、現地と人を写真とともにやさしく紹介しており、だれでもが楽しんで読めるのがうれしい。

この中で学生運動に挫折し、宮崎県の盲学校教諭となり、照葉樹林の保護に打ち込んでいる河野さんの言葉を紹介している。

「守れ、切るな、残せ、と叫ぶだけでは実りはない。人間にとって自然がどれほど大事か。その認識を深めることが本当の自然保護運動になる」

全く同感だ。(大谷 健)

(共同通信社、238ページ、1,300円)

新木場などを視察(3木会)

今年度初めての3木会は、3月19日午後、わが国最大の木材輸入港である15号埠頭、木造住宅、大型木造建築、ログハウスなどが建ち並ぶウッディランド東京、東京営林局木のアトリウムなどを視察するとともに、東京営林局で草野局長はじめ幹部と懇談した。

==== 会 員 紹 介 =====

今年度、次の方々が入会されました。

五十嵐英明(東京新聞・論説委員)

松岡 利勝(衆議院議員)

大野 敏明(産経新聞・農政クラブ)

上沢かおり(第一プランニングセンター)

倉本 憲秀(林業技術者)

中園 隆夫(東京新聞・岳人編集長)

藤田 敏一(林業エコノミスト・北四国支社長)

さくら展示園視察の案内

4月26日、東京営林局の植樹祭に合わせて、東京・高尾の森林科学園・さくら展示園を視察する予定。植樹祭に参加した後、さくら展示園を視察することになりますが、詳細は、植樹祭の案内とともに連絡します。大勢の参加をお願いします。(事務局)